佳作

「転機は突然、やってくる」

秋田県湯沢市立雄勝中学校
２年　菅野　修佳

「転機は突然、やってくる」
これは私が、未来の自分に伝えたい言葉です。
小さい頃の私は、とても体の弱い子どもでした。４歳の時には熱性痙攣をおこし、生死をさまようほどの重症になるという経験をしました。救急車を要請するほどの状態になり家族や近所の方々も必死で、兄は救急救命士の方々に
「僕の妹を助けてください。」
と、何回もお願いしていたそうです。その後、病院で処置をしてもらい、無事に帰宅することができました。
また、小学校６年生の時には大きなけがをしてしまいました。帰りの会が終わり、下校しようとしたその時、階段を踏み外してしまったのです。激しい足の痛みに耐え、自力で歩いてバスに乗り、帰宅しました。しかし、家に帰ってからも痛みが引かないばかりか、腫れも酷くなり、ついには歩くことさえつらい状況になっていました。翌日、病院に行き診察を受け、レントゲンを撮りました。幸い骨には異常がありませんでした。しかし、痛みがあるということで、足首を固定して人生で初めての松葉杖生活となってしまったのです。１週間後再び病院に行くと、今度はレントゲンだけでなく、ＭＲＩを撮ることになりました。その結果、くるぶしの靭帯が数本損傷していることが分かりました。その治療は１カ月ほど続き、毎回レントゲンを撮るたびに、
「いつ治るんだろう。」
と、とても不安な気持ちになっていました。
しかし、そんな私をいつも笑顔にしてくれたのが「診療放射線技師」の方々でした。いつもレントゲンを撮りに行くたびに、
「つらいだろうけど、頑張ろうね。」
と声をかけてもらうことで何度も励まされました。
それまで、小学生の私は特にはっきりとした将来の夢はありませんでした。しいて言うなら「優しい人になりたい」でした。それが、病気やけがのために出会った方々とふれあう中で、次第に「人のためになる仕事に就きたい」と気持ちが動き始めました。そして「人を助ける職業」に興味をもつようになりました。特に「診療放射線技師」の方々との出会いが、私の将来の目標をもつきっかけとなったのです。

「自分が優しく接することで、相手に喜んでもらえて、人のためになる仕事だな。」
と思い、もしかしたら自分に向いているかもしれない、と思えるようになりました。私は普段から人と関わることや、お世話をすることが好きで、そんな自分の長所を生かせるかもしれないと考えたからです。

私は今、中学２年生です。ちょうど総合的な学習の時間や学活などで「働くこと」について学んでいます。夏休み中には職場体験も実施されました。私は、将来の夢に近い、病院での看護体験に申し込みました。残念ながらコロナ感染予防のために、予定されていた体験は中止になってしまいましたが、将来の目標に近づくために必要なことを考えるきっかけになりました。

その中で、この「診療放射線技師」という職業を調べれば調べるほど、とても複雑な仕事だということが分かってきました。特に、放射線を当てながら写真を撮るので、一度に二つのことを同時進行で行わなければならず、一つでも失敗したら命に関わることもあるという難しさです。だから、小学生の私を励ましてくれた技師の皆さんのすごさを今改めて感じています。また、この職業は患者さんと直接触れ合い、大切な命と向き合う役割があります。だからこそ、基礎をしっかりと身に付け、必要な知識を理解するためにも日々の勉強への向き合い方が大切だと考えています。また、私自身の経験からも、患者さんと直接会話することで、患者さんの気持ちを落ち着かせ、つらい気持ちに寄り添うことで不安を軽減させる存在だと思っています。だから、より相手の気持ちを理解して対応する「コミュニケーション能力」を高めていきたいと思います。

私の命と向き合ってくださった方々との出会いで、私は将来の目標を見つけることができました。

「転機は突然、やってくる」
この言葉は、未来の自分にも忘れずにいてほしいと思います。ただ、実は転機は「突然」ではなく、日々の生活の小さな出来事の積み重ねが、ある日突然大きな転機につながるということに、今回気付くことができました。私の今の学校生活の中でも大きな転機につながる小さな出来事はたくさん転がっています。このことを噛みしめながら毎日の生活を大切にしていきたいと思います。